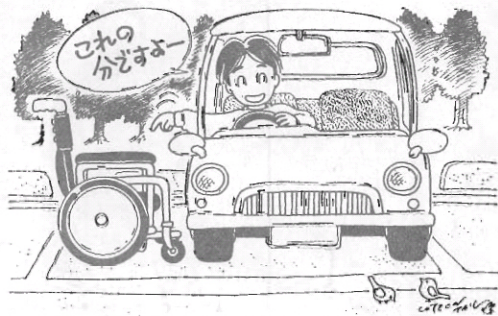




先日、友人の紹介で二人の車が、車いす用に改造した家車です。トレンディー俳優の織田裕二に似た「服部くん」は29歳。6年前、カナダでオートバイ事故に遭い、下半身の機能がまひしてしまっただけで、明るい性格の彼は「障害者」を乗り越えて強さ、と私は思う。

6年前、カナダでオートバイ事故に遭い、下半身の機能がまひしてしまっただけで、明るい性格の彼は「障害者」を乗り越えて強さ、と私は思う。



イラスト・大石 容子

ルマ好きの服部くんの運転は、前の方の景色だけを見ていて、ほとんど健康者のそれと変わらない。いや、むしろメリハリと思いやりのある、ほれほれするもので、思わず「服部ハットリ君」と嘆びたくなるほどである。

公共の交通機関をほとんど使えない服部くんたちのような障害者にとって、クルマは唯一の移動手段といつてもいい。そんな中で彼が訴えるのは、駐車スペースのことだ。高速道路のサービスエリアやスーパーの駐車場には車いす専用の駐車スペースがある。なるべく移動の距離が少なく、入り口に一番近い位置に設置されているのだが、ここに駐車する一般車のなんと多いことか。ちょっとくらいいいだろう、という気持ちなのだろうが、服部くんにとっては大問題。

障害者用の駐車スペースは、一般のそれよりも広く取ってあることに気が付いている人も多いだろう。これは車いすをクルマから降ろすためにドアを全開にしなければならぬからだ。一般用駐車スペースが確保できない。つまり隣にびったりと駐車された一般駐車場で、車いすの障害者

身障者の迷惑考えよう

は乗りの降りができないのである。車いすドライバーを特別に優遇しているのではない。破らぬ運搬し、移動するための最低条件なのである。「ほかの人が止められないように、入り口から近い所に設置してもらったほうがいいのかもしれない」と服部くんは言う。「一般の人が止めるのを法律で規制してもらって、味を改めて考えよ」とも言う。

「ほかの人が止められないように、入り口から近い所に設置してもらったほうがいいのかもしれない」と服部くんは言う。「一般の人が止めるのを法律で規制してもらって、味を改めて考えよ」とも言う。

「確かに、そんなことで罰金を取られては困るでしょうが、本当に情けないというものである。身障者の社会参加という、大変さうに聞かせるけれど、要は目の悪い人が眼鏡をかけ、歯の悪い人が差し歯をかけるように、足の悪い人が車いすに乗っているだけだ。普通のことと捉えよう。」「老眼や難聴になったり、

歩けなくなったりというのは、年をとれば、いすれたいまでもよくあること。身体障害者は、ただそれだけ、若い以外の原因で、早くなくなった時、早いか遅いかの違いだけで、みんな同じなんだよ」と、服部くんを介してくれた友人に言われ、耳を凝らしている自分に感謝する姿を、生きている意味を改めて考えよ、とまた一言述べた。

（羊）ターシャ・オリスト